

宮沢賢治作品における東洋という視点：ビ ヂテリアン大祭を中心に

人見, 千佐子

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies / 大学院紀要 = Bulletin of
graduate studies

(巻 / Volume)

66

(開始ページ / Start Page)

63

(終了ページ / End Page)

69

(発行年 / Year)

2011-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007531>

宮沢賢治作品における東洋という視点 ビヂテリアン大祭を中心に

社会学研究科 社会学専攻
国際日本学インスティテュート
博士後期課程1年 人見 千佐子

はじめに

宮沢賢治の童話作品は国境を感じさせない。イーハトーヴという西洋情緒ゆたかなドリームランドをつくりあげながらも、そこは日本国岩手県であると公言した。西洋風の地名が点在し、カタカナの名前を持った人物が闊歩する場所であると同時に、郷土色豊かで海外の雰囲気はみじんも感じさせないような場所でもある。日本と外国という明確な国境はここでは意味をなさないし、それは同時に日本人とそうではない人々というカテゴリーの曖昧さに気づかされることにつながっていく。もともとそのような区別は、賢治の世界認識にはそぐわないのかもしれない。そもそも境界線そのものの存在について疑問視していた賢治であるから当然ともいえよう。

賢治はどのような世界観を持って童話制作に臨んでいたであろうか。西洋に憧れ、貪欲にその科学、芸術、文化と知識といったものを摂取していった一方で、多くの漢書に親しみ、宗教を通して西域の文明文化に通じていたことも事実である。これらの作家研究の表象的な部分を理解する一方で、作品中の潜在的な意識にも着目すべき点が数多く残されている。本論は日本と外国諸国という相対的な視点を意識させるような、賢治としてはめずらしい作品「ビヂテリアン大祭」を通じ、賢治の国際意識、特に東洋意識を分析していくことが目的である。この作品には外国を意識させるキーワードがいくつかあるが本論では 支那人、東洋、そして日本に着目し、これらの言葉の使用の傾向を探ることにより、賢治の意図した外国諸国との関係性を探ることとする。

1. 支那人像の代表 陳

賢治作品の中では次のとおり「支那」という言葉が頻繁に使われている。¹

- ・「ビヂテリアン大祭」支那人 陳氏 その他(九巻)
- ・「土神ときつね」「あの赤い大きなやつを昔は支那では火と云ったんですよ」(九巻 p.247)
- ・「櫓の木大学士の野宿」「支那の六菱銀貨のくらゐのみかげのかけらが落ちてゐた」(九巻 p.366)
- ・「黒ぶだう」「支那の地理のことを書いた本なら見たいなあ」(十巻 p.84)
- ・「風の又三郎」「あとは支那人がおじぎするときのやうに両手を袖へ入れて」(十一巻 p.182)
- ・「『旅人のはなし』から」「旅人はそれよりも前にある支那の南部の町に参りました」(十二巻 p.236)
- ・「花椰菜」「あれは支那人に違いないと思った」(十二巻 p.265)
- ・「あけがた」「今朝は支那版画展覧会があつて」(十二巻 p.267)
- ・「山男の四月」支那人 陳 その他(十二巻)
- ・「電車」「ふん、支那人と思ったらドイツ人とのあいのこかい」(十二巻 p.271)
- ・「花壇工作」「仕事着のまま支那の將軍のやうに」(十二巻 p.285)
- ・「飢餓陣営」「支那戦」、「支那の大將」、「支那戦争」(十二巻)

¹ 本論における賢治作品のテキスト引用はすべて1995 新 校本 宮沢賢治全集 東京：筑摩書房 に拠る。

支那という言葉は、多くは何かを形容するために使われている。特に「山男の四月」及び「ビヂテリアン大祭」では特定の支那人が登場し、物語中で大切な役割を果たしている。しかも名前はどちらも 陳 である。この二つの作品の中で 陳 はどのようなイメージを持っているのであろうか。ビヂテリアン大祭の分析に入る前にまずは「山男の四月」にみる 陳 を分析し、ここから賢治の抱いていた支那人像をあぶりだしていくこととする。

(1) 社会的弱者として扱う例(「山男の四月」1922より)

「山男の四月」は「山男」が「支那人」である「陳」にだまされ、六神丸に変えられてしまう話である。まず山男と支那人との関係性に注目すると、山男は陳にだまされそのことに気づきながらも、生活に困窮する陳に同情してしまう。ここでは登場人物がなぜ山男と支那人なのかという問題も浮かびあがるであろう。そしてだまされて六神丸に変えられてしまっているのにも関わらず、同情するという場面には両者の潜在的なある関係性が根底にあるという解釈はできないだろうか。物語中、陳は明らかに人をさらい、姿かたちを六神丸に変えてしまうという悪人であるが、どうしても山男は陳を憎みきれない。

支那人は、外でしんとしてしまひました。じつにしばらくの間しいんとしてゐました。山男はこれは支那人が、両手を胸で重ねて泣いてゐるのかなとおもひました。さうしてみると、いままで峠や林のなかで、荷物をおろしてなにかひどく考え込んでゐたような支那人は、みんなこんなことを誰かに云はれたのだなと考へました。山男はもうすっかりかあいそうになって、いまのはうそだよと云はうとしてゐましたら、外の支那人があわれなしわがれた声で言ひました。

「それ、あまり同情ない。わたし商売たない。わたしおまんまたべない。わたし往生する、それあまり同情ない。」山男はもう支那人があんまり気の毒になってしまつて、おれのからだなどは、支那人が六十銭もうけて宿屋に行つて、鯛の頭や菜っ葉汁をたべるかはりにくれてやらうと思ひながら答へました。

「支那人さん、もういいよ。そんなに泣かなくてもいいよ。おれは町にはいったら、あまり声を出さないやうにしよう。安心しな。」

山男はもともと深山に住む男の怪物である。これは土着の人間つまり日本人であり、世の中に順応しきれない賢治自身の分身と解釈もできよう。一方陳は物語の中で異人としての孤立した姿が描かれている。つまり、山男と陳とはだまされ関係から解放された次元で考えれば、何らかの理由で世の中とで調和できず、孤独であるという共通点がある。そのことだけにおいて十分同情の余地があるのだと、結果山男は同情するに至るのだ。さらには行李の中にすでに陳によって六神丸に変えられた数人の支那人がいるが、山男は彼らが元の姿に戻る手助けをしようと心に決めるのである。お互い決定的な弱者として描かれる彼らに次第に生まれてくるのが、連帯感なのである。これらが日本人と中国人という東洋人同士であることは注目すべきであろう。社会的弱者同士の潜在的な連帯感という視点に加え、ここには東洋人同士のそれも内包しているかもしれないからである。例えば支那人ではなく西洋人と日本人(山男)との話であれば、このような同情の関係(言い換えれば共感)は構成上成り立ちにくいのではないか。当時の日本人の持つ西洋人と東洋人に対するイメージが異なるニュアンスを生みだすからである。この点に着目する場合、次のような時代背景は重要になってくる。

日清戦争、日露戦争での勝利は日本人の意識を大きくかえた。それまで列強国に相手にされていなかった日本は東アジアにおいての一等国の地位を自認し、満州、朝鮮への帝国主義的支配を当然のこととした。同時に西洋に憧れる眼差しは脱亜入欧の流れの中、東洋人蔑視とともに加速していく。

例えば夏目漱石はロンドン留学時代である1901年3月15日付の日記に「支那人八日本人ヨリモ遥カニ名譽アル国民ナリ」(夏目,1995 p.65)と記しているが、8年後の『それから』(1909~朝日新聞掲載)には次のように書いている。「先生今日は一日勉強ですな。どうです・・・(中略)演芸館で支那人(ちゃん)²の留学生が芝

² 日清戦争後、日本にやってくる中国人の留学生をチャン、チャンコロといつてからかうことがあった。これは「中国人」の中国音zong-guo-renがなまったものとされている。支那とは外国人の中国に対する呼称で、はじめ、インドの仏典に現れ、日本では江戸中期以降、第二次世界大戦未まで用いられた。もともと支那という名称に蔑視の意味はなかったが、イメージが悪く第二次世界大戦後はシナ人と片仮名表記に変わった。

居を演ってます。」(夏目,1971 p.168)

同じ年、漱石は中村是公とともに満州と朝鮮を約一カ月かけて旅行しており、「満韓ところどころ」にまとめている。しかしその表現には異民族の差別と批判が集中した。戦争の勝利者という日本の立ち位置は漱石の目線までにも影響を与えているのである。

この背景において東洋という一つのカテゴリーを意識し、支那人と日本人とを対等に扱っている賢治は独特の価値観を持っていたといえるのではないだろうか。物語の流れとして陳を単なる悪者として描くことも、ある意味自然といえるのに、それだけにしておかなかったところに賢治独特の思想が表れている。西成彦は賢治の世界を見る目全般に関して「明治以降の日本の歩みにある意味逆行するものとして、宮沢賢治の東北観、東北側から世界を見る見方が評価・測定できるのではないか。」(西, 2008, p.67)と述べ、さらに南部(東京、横浜、神戸など)からやってくる力、すなわち文明開化や脱亜入欧というイデオロギーに一方では屈服しつつも他方ではそこから逃れようとする一面があった、と分析している。いってみればこの「山男の四月」の作品では、支那人に象徴される賢治のアジアに対する視線は当時の風潮に逆行しているものの一つではないか。世の中のアジア軽視、もっと言えばアジア人軽視が否めない傾向にあり、西洋への極端な憧れという価値観が主であったのに対して、賢治は独自の東アジア重視の観点を持っていたことにならないか。そしてイーハトーヴという岩手県(東北地方)にあるドリームランドから賢治が見ていた世界は、東京から当時人々が見ていた世界とも少々異なった様相を呈しているのではないだろうか。この考えは次の「ピヂテリアン大祭」でより明確に表わされることになる。

(2) 尊敬する国際人として扱う例(「ピヂテリアン大祭」1923より)

日本人である賢治と 支那人 との間にある連帯感がより感じられ、また西洋側の立場との対立が暗示されている作品が「ピヂテリアン大祭」である。世界中から肉食主義に関して興味を持つ 信者 が集まり、激論を交わす。ここには 支那人 のほか、西洋人も多数参加し、彼らの作品中の位置づけを比較することができる。

ここで再登場する陳氏は、「山男の四月」の陳とも異なる性質を持っており、博識で洗練された紳士として描かれる。陳氏が主人公の 私(日本人)と対等であり、私 によって尊重されていることがわかる場面は次の通りである。

- ・こののろしは陳氏があげてあるのだ、陳氏が支那式黄竜の仕掛け花火をやったのだと気がつきましたので、大悦びでみんなにも説明しました。
- ・私は支那服の立派さをこの朝ぐらゐ感じたことはありません。陳氏はすっかり黒の支度をして、袖口と脊だけ、まばゆゐくらいまっ白に、髪は昨日の通りでしたが支那の勲章を一つつけてみました。(中略)「お早う。」私たちは手を握りました。二人の子供の助手も、両手を拱いたまま私に一揖しました。私も全く嬉しかったんです。ニュウファウンドランド島の青ぞらのしたで、この町重な東洋風の礼を受けたのです。
- ・私もそこで陳氏と並んでいちばんうしろに席をとりました。
- ・私が陳氏に立って敬意を示してる間に演壇にはもう次の論士が立ってゐました。

「陳氏」という尊敬を込めた呼称、英語でスピーチをする教養、そして黒いシナ服に身を包んだこぎれいな身なりの陳氏に「東洋風の礼をうけ」喜ぶ主人公。ここでは 私 が支那人である陳氏に最大の敬意を払っていることが分かる。参考までに、この作品の原稿には、もともとは「陳さん」と表記していたものをすべて推敲により「陳氏」に書き換えた跡が残っている。

この時代の 支那人 に対する日本人の意識については、時代背景が重要な要素となっていることは先に述べたが、安藤恭子はこの時代における支那人に対するイメージを調査し、詳細に分析している。(安藤,1992) それによれば日清戦争前は日本人は支那人を悪い国民とは思っていなかったし、憎悪というものを少しも抱いて

いなかった。しかし戦争が始まると、絵や唄に支那人に対する憎悪が反映し、戦争の形勢が日本に有利になると、俗謡・絵・新聞雑誌・芝居ことごとく支那人を愚弄嘲笑するものになっていった、という。であるとすれば、支那人を軽視していた、あるいは愚弄嘲笑していた、という事実は当時の日本国民の中では一般的であったと理解でき、このイメージと正反対の 支那人 像を創り上げた賢治は何か意図するところがあったと考えられるわけである。なお、安藤は賢治作品「十月の末」の中で行われた子供にからかわれる 支那人 から、子どもをしっかりとつける 西洋人 への改稿の意図は、テキストの中に地方の村落共同体を構造変化させる 近代 の系列を描きこみたかったからである、と結論づけている。たしかに「ビヂテリアン大祭」も後に「一九三一年極東ビヂテリアン大会見聞録」として改稿が試みられており、その中で支那人の 陳氏 は影をひそめ、かわりに西洋人が物語の主要人物として書き換えられようとしている点は「十月の末」と共通している。しかしほぼ同時期に成立している「ビヂテリアン大祭」での支那人に対する丁寧な扱いについては、賢治の他の意図が感じられるところでもあるので、二つの作品の関連性については、さらなる分析も視野に入れていきたい。

2. 比較文化の視点

(1) 日本 という言葉の使用

「ビヂテリアン大祭」には 日本 という言葉の使用が8か所見られる。これだけ多く使われるのは賢治作品の中では非常にめずらしい例といえる。日本以外の国が物語の舞台である場合に使われているようであるが、例えば「花椰菜」では「日本の春の夕方のように」と一度だけ使用されている。「ビヂテリアン大祭」はカナダが舞台であること、そして各国からの代表者が世界中から集まるという特異な状況を考えて、やはり賢治は意識して 日本 という単語を使っているように思われる。次に 日本 を使用している箇所を抜き出しておく。

日本の信者一同を代表して

日本では菜食主義者と訳しますが

日本であればまあ、ちょっと鯉のだしのはいったのもいけないという

実は私は日本から出ました際には

それはたしかに、日本でやる下り竜の仕掛け花火です

「今度のは私の郷国の名前では柳雲飛鳥と云ひます。(中略) 飛鳥は燕スワロウです。日本でも柳と燕と云ひますか。」(陳の台詞)

「日本の花火の名所は、東京両国橋ですね。」(陳の台詞)

「前論士は要するに仏教特に腐敗せる日本強権に対して一種骨董的好奇心を有するだけで・・・」(私の台詞)

これらの 日本 の言葉の役割は大きく次の二種にわけられよう。

A : 外国での会議であることから意識し使用する 日本 ~

B : 異文化との比較のため使用する 日本 ~

特に陳氏はここで自分の国の文化の一つである花火を誇らしげに披露するのであるが、同時に日本の花火の名所も話題にする。陳氏は理想の国際人としての役割をも担っているのだ。お互いの文化を認めあうこと、また差異をうけいれること、陳氏とのやりとりは新しい時代の国際化を感じさせるような先進的な印象さえ与えている。

(2) 東洋 という言葉の使用

この作品ではまた 東洋 という言葉を四度使用している。いずれも 東洋風 あるいは 東洋流 とし、ものの文化的傾向を表現するために使用している。広辞苑によれば東洋の意味は主に次の二つである。³

トルコ以東のアジア諸国の総称。

中国で、日本を指す称呼。

ここでは間違いなく の意味で使用しているとみて良いであろう。つまり、中国や日本、その周辺諸国を含む表現にするなら、という意味である。次に具体的に見ていくことにする。

- ・私は三越でこさえた白い麻のフロックコートを着ましたが、これはもちろん私の好みで作法ではありません。けれども元来きものといふものは東洋風に寒さをしのぐといふ考も勿論ですが、一方またカーライルの云ふ通り、装飾が第一なので、結局その人にあった相当の物をきちんとつけてあるのが一等ですから、私は一向何とも思ひませんでした。
- ・ニュウファウンドランド島の青空のしたで、この町重な東洋風の礼を受けたのです。
- ・異教徒席の中から赤い髪を立てた肥った丈の高い人が東洋風に形容しましたら、正に怒髪天を衝くといふ風で大股に祭壇に上っていきました。
- ・「しかるに何ゆえにマットン博士は東洋流に形容するならば怒髪天を衝いてこれを駁撃するか。」(カナダの村の小学校教師の台詞)

はじめに きもの に関する記述であるが、これはトーマス・カーライルの『衣装哲学』から引いたものとされている。

衣服の最初の目的は吾が教授の想像するところによれば、断熱でも禮節でもなく実は装飾であった。(柳田, 1964, p.50)

きもの(衣服)を着ることの第一の目的はカーライルは装飾、といっているが、賢治はそのカーライルの否定した断熱(=寒さをしのぐ) 礼節(=作法)は東洋における考え方の一つであるとも記している。文中には 西洋 あるいは 西欧 の語の使用はないが、東洋と西洋の価値観の差異が感じられる部分となっている。つまり潜在的に西洋と東洋の文化の比較がなされているといってもよいのではないだろうか。

次に「怒髪天を衝く」という表現に関して、これを日本風ではなく東洋風にと書き表しているところに興味を覚える。もともとは中国の『史記』からの引用「怒髪上衝冠」であると言われているが、にもかかわらず 中国風 あるいは 支那風 という表現でもない。しかも形容されているのはヘルシウス・マットン博士と呼ばれるまぎれもない西洋人であるのだ。西洋人を東洋風に形容するその真意はどこにあるのであろうか。さらに、最後の例では同じマットン博士を今度は西洋人であるカナダの小学校教師が同じように東洋流に形容していることは着目に値するであろう。象徴的な分析での深読みをおそれずに言うならば、怒髪天を衝く、という表現は『史記』においては藺相如が、他国の侵略者に対しての怒りをあらわにしたものであり、このイメージがビテリアン大祭の場面と重なり合うかもしれない。肉食主義が議論の中心にありながらも、それぞれの参加者は国の代表として出席し、ある意味侵略者である反対派に屈服せぬよう最善を尽くしているからである。

3. 西洋との対立

国境をもたない賢治作品群の中で特に「ビテリアン大祭」の際立つ特徴は、実在の国名が頻出し、それぞれの代表者に個性を持たせていることであろう。賢治作品には戦争を扱い、国という一つの単位を表現することはあっても、実在の名を使い、少なからず対立という形で描くのは非常に珍しいといえる。この作品中でも 日本 という言葉が現れるのも中国や他国との比較文化の流れの中であるし、 東洋 という言葉も西洋諸国

³ 漢語における東洋は15世紀中国を出た船が南下する際に、ヴェトナム沿いの航路を西洋、フィリピン沿いを東洋と称したことに由来する。広辞苑によれば今でも中国では東洋人という意識はなく 東洋=日本 という意識が強いという。

との差異とその認識があつて初めて現れている。ただし、西洋と東洋が明確な線引きで持って対立しているわけではない。大まかにいえば、トルコを含む菜食主義の側に立つ東洋サイドの人間と、「シカゴ畜産組合」に代表される西洋との対立が火花を散らすのだが、はっきりと西洋と東洋にわかれ意見の相違で対立しているわけではない。また、宗教上の考え方の違いも菜食というテーマにおいて問題になる場面もあるが、どの国がどちらを支持する、といったような明確性は持たせていない。一方で「山男の四月」における異人が東洋人である必要があるのと同時に、「ピヂテリアン大祭」でも東洋人たちの潜在的役割があるのではないかと考えられる。衣・食に関する大ざっぱな異質性は東西の文化の差異という地盤があつてこそ読者に訴えてくるものであり、東洋文化の共通点を理解した上での東洋の尊重にもつながっていくのだ。こうした見方をしていくと、例えば前述の陳氏による東洋風の礼に私 が嬉しくなったのも、ニューファウンドランドという西洋の地においてだからこそ、なおその意味が増すのである。わざわざ西洋人を東洋風に形容するのも、『史記』という誇るべき書物、中国のというよりも東洋の思想という共有感覚、そういった一体感ないし連帯感を賢治自身感じていた証なのではないだろうか。

結論

境界線としての国境を意識しない物語世界を創造した賢治だったが、本論で扱った「山男の四月」および「ピヂテリアン大祭」には少なくとも東洋という視点が潜在しているようである。それは近代化の進む西洋に対する劣等意識の可能性をもどこかに孕みながらの、東洋諸国との連帯意識といえるかもしれない。いわゆる大アジア主義を掲げていた当時の日本の立ち位置から見れば、この東洋という視点は賢治独特のものという解釈もでき大変興味深い。

「山男の四月」においては、山男と支那人 陳 がともに弱者であることにより、両者間にそしてともに被害者である他の支那人たちとの連帯意識をめばえさせる。

「ピヂテリアン大祭」において当時はまだ珍しい菜食主義に関する知識と深い理解はもとより、読む者を科学的、宗教的あるいは思想的側面の思考と判断へと誘う。このようないわば論理的思考と判断の向こうに潜ませるのは、漠然とした西洋文化の対極にある東洋文化とその誇り、といえようか。熱い議論を繰り広げるのはあくまでも菜食主義というテーマに関してなのであり、イデオロギーに対する非難でも植民地主義に対する反感でもない。さらに当時の日本で積極的に西洋文化を取り入れようとする一方で東洋独自の文化を軽視する傾向があったことを鑑みるに、賢治のこの視点すなわち実在の国境を越えてなお共有しうる文化、文明に東洋の誇りを感じるという部分、まさにここに賢治独自の世界に対する価値観があることに気づくのである。それは自国日本としての誇りではなく、あくまでも日本を含むひとつながりの東洋を意識していることになるだろう。賢治はその作品世界に国境を表すことはなかったが、潜在的な東洋人としての意識、すなわち中国の古典を教養として共有し、宗教や、衣食に関して同じ文化圏に属しているという意識を表象することに成功していた、とはいえないか。あるいは東洋風に形容されたマットン博士のように、西洋的なものを表わすのに東洋の表現を使うという、感情的にはどこか理解できるような西洋文明への抵抗ともとれる試みをしていたのではないだろうか。しかし例えば、山室信一の言うように、日本のアジア主義はあくまで欧米へのカウンターとして形成された、とする立場はここでも否めないであろう。(山室,1989)つまり、シカゴ畜産組合という手強い相手がいたからこそ、同じ意見を持つもの同士、ひいては食文化に代表される文化そのものの共通点がより多いと思われる同士が手を組んだとも解釈できるのである。その点では西洋に対する劣等意識をどこかに孕みながら、という観点はやはりぬぐいきれない。この点についてはさらなる分析も必要になるう

賢治の物語世界は複雑で常に複眼的観察が要求される。「ピヂテリアン大祭」はまた後に「一九三一年極東ピヂテリアン大会見聞録」として加筆が試みられ、未完のままになっている。激動の時代に賢治の東洋という視点がどのように変化していったのか、そしてまた西洋との関わりを賢治がどう受け入れていったのか、今後研究を継続する予定である。

【引用・参考文献】

- 青木保他 1999 『近代日本文化論2 日本人の自己認識』東京：岩波書店
- 安藤恭子 1992 「宮沢賢治『十月の末』論 浸食される 地方 『日本文学』41 3月号 東京：日本文学協会
- 和泉 新他 1992 『中国故事成語大辞典』東京：東京堂出版
- 小川環樹他訳 1975 『史記列伝』
- 佐々木英昭編 1996 『異文化への視線』名古屋：名古屋大学出版会
- 清水正 2006 「ピヂテリアン大祭序論」『国文学 解釈と鑑賞』71(9) 東京：至文堂
- 島村輝 1993 「ピヂテリアン大祭(宮沢賢治の世界)」『国文学 解釈と鑑賞』58(9) 東京：至文堂
- Carlyle Thomas., 1834. Sartor Resartus
- (柳田 泉訳 1946 『サアタア・リザータス 衣装哲学』東京：春秋社)
- 田口昭典 1996 「『ピヂテリアン大祭』の背景と現代社会にあたえるもの」『国文学 解釈と鑑賞』61(11) 東京：至文堂
- 段裕行 1998 「ピヂテリアン大祭 まなざしの中の 東洋」『広島大学教育学部紀要第二部第47号 広島：広島大学
- 夏目漱石 1971 『明治文学全集55夏目漱石集』東京：ちくま書房
- 夏目漱石 1995 『漱石全集第十九巻』東京：岩波書店
- 西 成彦ほか 2008 「世界からみたイーハトーヴ」『宮沢賢治 驚異の想像力 その源泉と多様性』東京：朝文社
- 原 子朗 1999 『宮澤賢治語彙辞典 東京：東京書籍』
- P・アブラハム・ジョージ 2006 「宮澤賢治の作品にみられる東洋的思想 「菜食主義」を中心に」『世界からみたイーハトーヴ』『宮沢賢治 驚異の想像力 その源泉と多様性』東京：朝文社
- 宮澤賢治 『新 校本 宮沢賢治全集 第九巻童話 本文篇』1995東京：筑摩書房
- 宮澤賢治 『新 校本 宮沢賢治全集 第十巻童話 本文篇』1995東京：筑摩書房
- 宮澤賢治 『新 校本 宮沢賢治全集 第十一巻童話 本文篇』1996東京：筑摩書房
- 宮澤賢治 『新 校本 宮沢賢治全集 第十二巻童話 ・劇・その他本文篇』1995 東京：筑摩書房
- 宮澤健太郎 1990 「賢治と近代(西洋)文明」『国文学 解釈と鑑賞』東京：至文堂
- 宮沢清六 1951 「極東ピヂテリアン大会秘録」『四次元』3(5)
- 山室信一 1989 「日本外交とアジア主義の交錯」『日本外交におけるアジア主義』東京：岩波書店
- 渡辺宏 2003 「ピヂテリアン大祭の討論を検討する」『国文学 解釈と鑑賞』68(9) 東京：至文堂
- 渡辺芳紀 2007 『宮沢賢治大辞典』東京：勉誠出版